



～1950年から1960年代まで使われた道具たち→電化して、ネット時代へ～

1 イカ釣り船：イカ釣り漁業は、夜、集魚灯に集まるイカを自動イカ釣り機によって釣り上げる漁業。泊漁港では、昭和40年代までは19トン未満の動力漁船が操業し、昭和42年からは30トン以上の大型漁船が出現した。



2 天秤棒：両はじに重い物をぶら下げたり、たくさんの軽い物を取り付けたりして、肩に担いで運ぶ棒のことをいう。



3 洗濯板とたらい：洗濯のための板状の道具。波の形の段がついている。ヨーロッパで発明され、明治時代に日本に伝わる。今は、楽器（ウォッシュボード）や靴下などの予備洗いで使われることがある。



4 石臼：溝を掘った丸い石を重ねたもの。上下に重ねた石をすり合わせ、上の穴からそばや小麦、大豆などを入れて粉にするための道具。



5 千歯コキ：脱穀用農具。稲の穂を木の台の上の鉄製の櫛状の歯になでるようにこすり挽き、種籾を穂から取り去る道具。大切な種籾を痛めず扱くことが出来たため、昭和の半ば頃まで使われていた。



6 足踏み脱穀機：明治時代末になると、千歯扱きよりも性能のいい足踏み脱穀機が開発され広まった。



7 唐箕：風力を利用して稲や豆、アズキなどの籾や豆を、藁くずやごみと分ける道具。明治、大正、昭和と、長く使われた。中国から伝わった箕なので、そう名付けられた。



8 えんつこ：赤ん坊をいれるワラ製のいれもの。ワラを敷いた上にボド（古い布）を敷き、底のところには灰も入れて小便などをしみ込ませるようにした。



9 蓑（ケラ）：農作業のときの雨具・防寒具。わらやシナの木からつくられ、肩を覆う部分と下半身を覆う腰蓑の部分がある。



10 コビキノコ：縦挽きの歯を持ち、丸太から板を切り出すときに使うノコギリ。はじめの切り込みはむずかしいが、あとはほぼ自動的に平面に切れる。



11 火鉢と長火鉢：火鉢と炭は、奈良・平安時代から上流階級で使われ、江戸時代に広く使われた。近くによって暖をとる、炭火の上に鉄瓶をかけてお湯を沸かしたり、網をのせて餅を焼いたり、便利に使える。



12 ちゃぶ台：四本脚の円い形の食事用座卓。折りたたみ式で、上座、下座がなく、食事の他、学習机や針仕事など家族が自然と集まった。大正時代から昭和の初めまで、全国的に使われた。いろいろ→箱膳・お膳→ちゃぶ台→ダイニングテーブルと食事風景が変化した。



13 テレビ・テレビジョンセット：1939年日本でテレビ実験放送開始。1952年松下電器産業が日本初の民生用テレビを発売。1956年には、NHKがカラーテレビ実験放送開始した。



14 **デルビル磁石式電話機**：1896年（明治29年）電話局の呼び出しは、電話機内部の磁石発電機を回し、電流を送って行った。昭和40年頃まで約70年間使用された。



15 **600-A2形自動式卓上電話機**：1963年（昭和38年～44年頃）日本電気株式会社の黒電話で、通話性能と経済性の上で完成された電話機といわれる。日本において、初めてプリント基板を使った量産型電話機。



16 **足踏みミシン**：足の踏み込みを動力にした縫い合わせる機械。約100年前から国産化され、戦後、和装から洋装に変わっていったときに、盛んに製造され、一般家庭にも広がった。ゆっくり踏んだりして、自分の好きなペースで縫うことができる。



17 **手回し洗濯機**：洗濯物と水・石鹼を入れて、回すだけ。石鹼の泡が出て中の気圧が上がり、ふたを取ると一気に気圧がさがり汚れを落とすという仕組み。



18 **火熨斗と焼きごて**：火熨斗は、江戸時代から使われていて、丸い部分に火のついた炭を入れて、その熱で布のシワをのばす。焼きごては、火鉢の中に入れて熱くし、水を少しかけて蒸発すると、熱くなっていることがわかり、細かい部分などに使った。



19 **炭火アイロン**：明治時代に外国から入ってきた。フタを開けて火のついた炭を入れて、その熱で布のシワをのばす。昭和30年代の電気アイロンが広まり、しだいにその姿を消すこととなった。



20 **真空管ラジオ コロンビア RA-71**：ラジオは、ラジオ放送開始の大正14（1925）年から昭和にかけてテレビが出るまで流行した。日本コロンビアの全波スーパーラジオで、高級受信機。1948年にはオールウェーブ（短波と中波）として発売された。国民型2号が¥2,310に対して¥17,000もした。これは、その後続機にあたる。



21 **金銭分類器**：お店の勘定場（現在のレジ）に置いて使用した木製の金銭分類器。お金を分類し、出し入れするのに利用した。左上にお金の投入口があり、右のレバーを下げると引き出しが開くようになっている。



22 **行燈とランプ**：行燈は江戸時代に普及した。それまでは火皿がおおわれていなかった。中央の火皿に油を入れ、木綿などの灯心に点火して使用。当時の和ロウソクはとても高く、主に菜種油を使用。庶民はさらに安い魚の油を使用。さらに貧しい人々は「暗くなったら寝る」という生活。明治時代に石油ランプが普及し始め、菜種油の行燈は姿を消していった。



23 **白熱球**：1923年（大正12年）～戦後に普及。フィラメント電球ともいう。ジョゼフ・スワソンが發明。本格的な実用化はトーマス・エジソンによる。六ヶ所村では、大正12年に初めて泊地区で電灯がついた。昭和20年代から戦後にかけて、電気が普及する。



24 **腕用ポンプ**：昭和14年に六ヶ所村が購入。人力でピストンを動かして放水する仕組みの消防のためのポンプ。明治8年（1875）に東京警視庁がフランスから輸入し、明治17年（1884）にドイツ製をモデルにして東京横山町の岡崎屋茂兵衛製作所で作られた。全国的にも現存する腕用ポンプは少なく、大変珍しい。



25 **釣瓶井戸**：井戸の屋根に滑車をかけて釣瓶桶で水をくみ上げるものを釣瓶井戸という。

